

資料名「みんなの広場」

テーマ（進んでみんなのために働く心を育てるための工夫）

学校名（大竹市立玖波小学校）

- 1 学 年 第4学年
- 2 主題名 みんなのために 4－（2）
- 3 ねらい 足にグッと力を入れた時のぼくの気持ちを考えることを通して、働くことの喜びや大切さを知り、進んでみんなのために働こうとする態度を育てる。
- 4 資料名 「みんなの広場」（自作資料）
- 5 学習指導過程

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	留意点（☆評価の観点）
導入	1 みんなのために仕事をする時の気持ちを振り返る。	○ 学級の仕事をする時、どんな気持ちでしていますか。 ・ 面倒くさい。 ・ ちゃんとしないといけない。 ・ みんなのためにがんばろう。	○ 自分の仕事を振り返らせ、ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。
展開	2 資料を読み、話し合う。	○ 広場作りを始めた時、ぼくはどんなことを考えていたでしょう。 ・ ここからはぼくらの出番だ。 ・ きれいな広場を作るぞ。 ・ 通る人に喜んでもらいたいな。 ○ 石集めを何度もしているうちにぼくはどんな気持ちになってきたでしょう。 ・ 体操服が汚れて怒られるかもしれないな。 ・ 暑いし体もだるい。もう、休みたい。 ・ こんなに石を運んでもなかなかできない。本当にきれいな広場ができるのかな。 ◎ 足にグッと力を入れた時、ぼくは、どんなことを考えていたでしょう。 ・ みんなもぼくのまねをして、たくさん石を運んでいる。ぼくもがんばろう。 ・ ぼくは、小学生の代表だった。がんばらなくてはいけない。 ・ 通る人に喜んでもらえるようにきれいな広場を作ろう。 ・ みんなでやれば、広場を作り上げられる。がんばろう。	○ 「どうしてがんばりたいと思ったのでしょうか。」と問い直し、通る人に喜んでもらいたいというぼくの気持ちに気付かせる。 ○ 暑さや体のだるさ、仕事の大変さや出来上がりへの不安から、続ける意欲がなくなっているぼくの気持ちに共感させる。 ○ 周りの人のがんばりを感じたり、何のために石を運んでいるかを思い出したりすることで、再びやる気になったぼくの気持ちを考えさせる。 ○ 「途中、しんどい思いが大きかったのに、どうしてそういう気持ちに変わったのでしょうか。」と問い直し、協力の大切さや役立つ喜び等、ねらいとする道徳的価値への考えを深めさせる。

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 放課後、広場を見つめながら、ぼくはどんなことを考えたでしょうか。 ・力を合わせれば、こんなにすごい広場ができるんだ。 ・ぼくも中学生に元気をあげていたんだな。 ・みんながこの広場を見て、喜んでくれるといいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 改めて、みんなのために最後まで働いたことによる充実感を感じているぼくの気持ちに共感させる。 ☆ みんなのために働くことの喜びや大切さに気付くことができる。(ワークシート)
終 末	3 自分の生活を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの仕事をする時の気持ちと今の気持ちを比べて、自分の生活を振り返って考えたことを書きましょう。 ・今まで、係の仕事は面倒くさいと思いつつやっていたけど、みんなに喜んでもらえるように、積極的にがんばりたい。 ・お年寄りの人が大変そうだったので、自分にできることをしたいと思って、敬老会の片づけをした。ありがとうと言われてうれしかった。 ・家の人が忙しい時、これからは、自分から手伝いたい。家族に喜んでもらいたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主人公のぼくのような経験を思い出した場合は、出来事だけでなく、気持ちも振り返らせる。 ○ 導入時に振り返った学級の仕事をする時の気持ちと今の気持ちに変化があるか考えさせる。

活用に向けたポイント

1 児童の実態

本校の児童は、決められた仕事は真面目に行おうとする。しかし、自分から意欲的に仕事をする児童がいる反面、「面倒くさい」「やらないといけないからやる」という児童も多い。

また、中学生や地域の人との体験活動を計画的に実施しており、児童は楽しみにしている。

2 教材開発及び指導過程の工夫

・2年前に小・中学校が連携して、駅前の荒地を整備し、地域の憩いの場「スクラム広場」作りに取り組んだ。本資料は、その活動後に中学生が書いた作文を資料化したものである。

・資料化に当たっては、中学年の発達の段階を考え、主人公の気持ちに共感しやすいように、同年代の「ぼく」を主人公にした。

・導入で、学級の仕事をする時の気持ちを振り返らせ、終末で、今までの気持ちと学習を終えての気持ちを比較しながら自分の生活について振り返らせることで、自分の気持ちの変化に気付くことができるようにした。

・授業の最後に、この資料は、「スクラム広場」が最初に作られた時の話であることを知らせ、自分たちのスクラム広場の活動について、改めて見直すきっかけとした。

・後日、「わたしたちの道徳」P.132, 133 を活用し、教師や友達、家族からのコメントにより、働くことの喜びや大切さについて実感させるようにする。

3 発問の工夫

・展開前段で、不安やだるさから、意欲が減退した主人公の気持ちにしっかり共感させておく。中心発問で「足にグッと力を入れた時、どんなことを考えていたでしょう。」と問い、「途中、しんどい思いが大きかったのにどうしてそうい

う気持ちに変わったのでしょうか。」と問い直すことで、協力の大切さや役立つ喜び等、ねらいとする道徳的価値への考えをさらに深めていく。

4 児童の反応

・中心発問では、「自分は頼りにされている」「みんなといっしょにがんばろう」「小学生の代表としてがんばらないといけない」「地域の人のために」等の反応が出された。

・導入時では、「学級の仕事は面倒くさい。」「ちゃんとしないといけないからする。」という反応が出されていたが、終末の振り返りでは、「みんなから頼りにされる〇〇係になってがんばりたい。」「わたしは、〇〇係だが、みんなが喜んでくれているか知りたくなった。」「みんなと力を合わせればできることがわかった。〇〇係でもみんなのために楽しく遊べるルールを考えたい。」「家で手伝いをしよう。お母さんが喜んでくれるかな。」等の反応が出された。このことにより、勤労の道徳的価値について考えを深められたのではないかと思う。

・最後に「スクラム広場」の話であることを知らせた時、「あー、あそこは荒地地だったんだ。すごいなあ。」というつぶやきが出された。

5 活用に当たってのポイント

・本時を、体験活動前に設定する。道徳的実践力の高まりにより体験活動を充実させ、活動後に「わたしたちの道徳」を活用し、働くことの喜びや大切さについて実感できるようにする。

・主人公の再びがんばろうとした時の気持ちやその理由についてしっかり考えさせ、勤労についての考えを深めたのちに、導入での考えと比べながら、自分の生活を振り返り、交流する。交流の中で、気付きや意欲が膨らんでいくと思われる。

みんなの広場 ひろば

ぼくたちの学校は駅の近くにある。ある日、中学生から「駅前のある地をきれいにして通る人によろこんでもらおう」とよびかけがあった。そのある地は、草ぼうぼうでじやり石がいっぱいあり、気になっていたところだ。さっそく、中学校の生徒会と小学校の児童会が中心になって計画を立て、作業に入るようになった。

まず、中学生が市長さんにたのんで、おとなの人に長い草をかってもらう。その後、中学生が短くなった草をぬき、土をおおっているじやり石を取りのぞく。最後に、小学生が加わって広場の道の道や花だんを作る計画だ。計画はできたものの、あの草ぼうぼうの土地をきれいな広場に変えることができるのか、ぼくは少し不安だった。

小学生が加わって作業をする日、ぼくはびっくりした。草はきれいにかられ、土をおおっているじやり石は取りのぞかれていた。「あのあれ地が・・・」ぼくは、中学生はすごいなと思った。

さあ、ここからがぼくたち小学生の出番だ。中学生に加わって、広場の中の道や花だんを作って、花を植えることになっている。小学生は、四、五、六年生が代表で参加するので、四年生のぼくは小学校代表としてがんばらなければならない。作業は、地いきの方にも手伝っていただいて、いっしょにやることになった。

その日は、太陽が照りつける六月の暑い日だった。中学生から今日の作業の手順について説明を聞いた。



「小学生のみなさん、今日は私たちといっしょに広場作りに参加してくれてありがとう。駅前を通る方に喜んでいただくために、力を合わせてきれいな広場を作りましょう。今日は、石を使って、デザインした下絵の通りに道を作っていきます。その後、花を植えます。たくさん石が必要なのでがんばって集めて下さい。」

ぼくは、中学生が作った広場のデザインがカッコよくて、とても気に入った。さっそく石集めを始めた。両手いっぱい集めては、下絵の通りに石を置いていった。何度もくり返していくうちに、ぼくは、もつとたくさん運ぶことができる方法を思いついた。着ていた体そう服のすそを広げ、その中に石を入れて運ぶのだ。こうして、何度も何度も石運びをくり返した。

そのうち体そう服が茶色になり、あせもまぎってドロドロになってきた。じりじりと太陽が照りつける。せ中もあせでびっしり。のどもカラカラだ。

ひたいのあせをぬぐってまわりを見た。がんばったつもりなのに、まだ



半分もできていない。ぼくは、体そう服に石を入れたまましばらく動けなくなった。

その時、「たかし君のやり方がいいね。ぼくもやってみよう。」とひろし君が話しかけてきて、すそを広げた。「ぼくも。」とみんなもまねをし始めた。石集めがずいぶん早く進んでいくようだった。中学生は、手を休めず、にこにこしてぼくたちのようすを見てくれている。地いきの方が、あせをぬぐいながら、「君たちみたいなお子どもがいてたのもしいな。」と声をかけて下さった。

さつきまでの体のたるさがふき飛んでいくようだった。

「そうだ。」

そうつぶやいてから、ぼくは、もう一度広場を見回し、今度は、足にグツと力を入れ、石を集め始めた。



昼をすぎたころ、道ができあがった。下絵よりずっとかつこよくできた。花を植えると、もとのあれ地が思い出せないくらいきれいな広場になった。「すごい。」「やったー。」あちらこちらからかん声があがった。記念写真をとる時のみんなの顔は、あせや土でよごれていたが、笑顔でいっぱいだった。

数日たって、中学生から届いた手紙を先生が読んで下さった。

「小学生のみなさん、みなさんといっしょに広場を作ることができて楽しかったです。この広場は、もともとあれ地だったので、じゃり石が取っても取っても出てきて、気持ちが負けそうになりました。

でも、『ここまでは、中学生ががんばろう。』と仲間のみんなではげまし合いながら全部取りのぞいていきました。小学生のみなさんと活動した日は、とても暑かったですね。みんながあせびっしょりになって、自分の服がよごれるのも気にせず、広げた服のすそいっばいに石を集めている姿に、『わたしもがんばって広場を作りあげなくちゃ。』と元気をもらいました。できあがった時は、何ともいえない気持ちになりました。

わたしは、小学生のみなさんや地いきの方といっしょに作ったこの広場が、みんなのいこいの場になってほしいなと心から思いました。

小学生のみなさん、季節が変わるころ、また、いっしょに花植えをしたいですね。」

手紙を読んでもらいながら、ぼくは、思わず笑顔になった。

その日の放課後、ぼくは、広場を見に行った。ぼくたちが植えた花が、夏の風にやさしくゆれていた。

